氏　　名	金（キム）　大（デ）容（ヨン）
学位の種類	博　士　（美　術）
学位記番号	博　美　第 253 号
学位授与年月日	平成21年 3 月25日
学位論文等題目	〈作品〉粉青流掛面取壺 〈論文〉無為自然の壺－朝鮮陶磁への回帰－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　島　田　文　雄
（論文第１副査）	〃　准教授　（　〃　）　片　山　ま　び
（作品第１副査）	〃　教　授　（　〃　）　豊　福　　誠
（副査）	〃　〃　（　〃　）　三田村　有　純

（論文内容の要旨）

自分の作品が生まれてくる源となった絡みあう数々の影響の跡を振り返ると、筆者は今まで、伝統を目標としてきたのではなく、自分の感性に響く美に忠実に作陶を続けてきた。しかし、この論文を執筆する過程において、自らの作業のなかに韓国人としての感性、つまり自らの内部に根付いていた遠い過去から続く伝統―朝鮮前期の粉青と朝鮮中期の白磁の二つの造形―を発見したのである。それは長く筆者が問題意識としてきたことでもあった。

なぜなら、現在の韓国工芸を見るにつけ、本来の意味での「伝承（伝統）工芸」といえるものは無きに等しい。それは、多くの「伝承工芸」の作家が、新しい造形を目指すなかで伝統をとりあげる、あるいはそれに気づくのではなく、伝統の模倣、すなわち再現の段階にとどまっているからである。一方で現代陶芸のもうひとつの大きな潮流をなす「オブジェ」があるが、新しい造形を目指すあまり、往々にして工芸ならではプロセスや造形、あるいは過去からの伝統を無視したものとなっている。

こうした状況のなかで、ひとりの作家が本来の意味での工芸、すなわち新しい造形を生み出す時、過去からの時間の流れを認識し、発見することは決して無駄な作業とは思えないのである。そこで本稿は、筆者がめざす「粉青流掛面取壺」という新しい壺の制作過程を通じ、そこで発見した朝鮮前・中期の陶磁の造形を論じることを目指す。その考察においては、いわゆる最終的な結果として現れる表面的な造形美だけではなく、むしろ轆轤や化粧掛けといった制作過程に焦点をあてることとした。

第１章では、轆轤と面取を中心にとりあげた。無垢の粘土を轆轤の上に据え置き、回転させ挽きあげると「壺」という形になる。その壺は、粘土という材料が持つ可塑性と、轆轤という道具が持つ遠心力によって作り出される自然の形である。その形には、自然の摂理に逆らわない美しさがあり、特別な場所に行かなければ見ることが出来ない様な美しさではなく、実は私たちの日常の中に埋もれているちょっとした美しさである。このように作られた壺に少し手を加え、面取りをすると、そこには、光と影の作用で美しく繊細なグラデーションを生み出され、陰翳の美が感じられる面取壺になる。

第２章では、装飾について化粧掛けを中心に論じた。長年をかけて無心に習得した技術に任せ、即興で偶然の効果を期待して化粧掛けをすると、その文様は、即興的行為で現われた偶然性によって、自然に昇華された不可欠な霧状文様であり、いわば巫舞のような無意識と狂気の間の行為により、このような文様が生じる。さらにその壺に窯変が加わると、それは人間が作り出せない美しさになり、魅力的な装飾となる。その壺こそが粉青面取窯変壺であると考える。

第３章では、実際の制作過程について、原料・轆轤（成形）・装飾（面取・白化粧）・釉薬・焼成につ

いて考察した。

結論として、筆者は韓国人としての感性が今までの作陶の足元を支えてきてくれたのだと最近になって気がついた。作業の積み重ねにより、たどり着いた地点が偶然にも粉青沙器と18世紀の白磁であった。冒頭に述べたように、現代韓国における「伝承（伝統）工芸」は、模倣に留まっており、その芸術性の発展の低迷が現状なのである。前近代の美術は現代の芸術感覚と調和を成すことが出来なければ徐々にその存在価値は先細り、結果的には土産物としての運命を歩むことにならざるをえない。筆者は気がつかなかったとはいえ、故郷を離れてやっと蕾が膨らみはじめた朝鮮陶磁への愛着を開花させるべく、これからも邁進したい。そのことは伝統が新しい造形の誕生のための土台としての必須要素である点を念頭に置き、時代に置き去りにされる前に新しい芸術感覚で伝統芸術を昇華させることにつながると確信している。

（博士論文審査結果の要旨）

審査対象者の執筆過程は、「日々の仕事を言語化する過程」であったと言える。すなわち自らの作品が、祖国の古陶磁や伝統文化と強い紐帯関係にあることの気づきの過程であった。

そのため歴史学系の論文とは異なり、１、２章では恣意的に古陶磁と自らの作品との共通性を抽出し、論じている。また結果としての作品よりも、作陶プロセスに注目した点は、作家ならではの視点として興味深い。作品抽出と比較がきわめて恣意的であるにもかかわらず、各論が感想に終わっていないのは、審査対象者が自らの仕事に真摯に取り組んできたことの証であろう。最終章では、自らの制作過程について詳しく論じており、前半で論じてきた作陶プロセスへのこだわりを、確かに論証するものとなっている。

本論文は、まず日々の仕事の言語化によって韓国の古陶磁の真髄にせまりえた、という点で高く評価される。また言語化による、自らの内に眠るものの気づきにより、つぎに大きく前進するための基盤を築いたという点で、学位を授与するに十分な資格を持つものと考える。

（作品審査結果の要旨）

感性に響く美に忠実に作陶を続け、自らの研究のなかに韓国人としての感性、つまり遠い過去から続く伝統、朝鮮前期の粉青と朝鮮中期の白磁の二つの造形を発見した。粉青陶磁の造形美、轆轤や化粧掛けなど偶然によって表現された陶磁制作過程に魅力を感じ、伝統的創造をめざし「粉青流掛面取壺」という新しい壺の制作を研究テーマとしている。

朝鮮前期、中期は、長きにわたる韓国陶磁の歴史のなかで、極めて独自性が高く、最も朝鮮らしい特徴をもつ陶磁が多数作られた時期である。こうしたなかで生まれた粉青沙器のなかに韓国の民族性を見出し、共通する感覚を発見している。

轆轤による壺、面取り、白化粧掛け、焼成過程で現れる窯変の４つの要素を意識しながら偶然を求め、偶然性に則った自然美をねらっている。力強い稜線で面取られた壺は、朝鮮時代の控えめな、清楚な面取りとは違って、生命感溢れる形態であり、その形を柔らかく包むように流し掛けられている白化粧は、一気に流された偶然、山水を思わせるような景観を生み出しだしている。登り窯内の窯変、釉薬の変化が一層偶然の上に偶然を生み出し、力強い形態、格調高い「粉青流掛面取壺」を生み出している。面取りの現代性と窯変による偶然性を追いながら表現された優れた作品であると評価する。

（総合審査結果の要旨）

金大容の博士課程の３年間は様々な制作遍歴を通過して新しい現代の粉青沙器の創造に一様の答えを生み出したといえる。偶然による創造、登り窯焼成による窯変に果敢に挑戦した。

論文は朝鮮前期の粉青沙器・朝鮮中期の白磁の造形と自己の作品についての論考である。自らの背景を理論的にさぐり、轆轤や化粧掛けといった制作過程への分析を通した考察となっている。

第１章においては、轆轤と面取が作り上げる形に、自然の摂理に逆らわない美しさが認められ、面取りは光と影の作用で美しく繊細なグラデーションを生み出される。作者の面取壺は陰翳の美を備えた美しさを感ずると述べている。

第２章においては、装飾、粉青、化粧掛けについて論考している。即興的な化粧がけは偶然性の強い文様が生じる。そこに窯変が加わると、より自然な美しさとなり、朝鮮陶磁の魅力に共通した表現美が作られる。

第３章においては、原料・轆轤（成形）・装飾（面取・白化粧）・釉薬・焼成等の制作過程を考察し述べている。

作者は日本での作陶生活を通して膨らみはじめた朝鮮陶磁への愛着、韓国人としての感性、粉青沙器と18世紀の白磁の美が作陶の足元を支えてきたと認識するようになった。新しい造形の誕生を開花させるべく、新しい芸術感覚で伝統芸術を昇華させることに邁進したいと意気込みを述べている。

その狙いは十分に発揮されており優れた作品であると評価する。論考においては自己の内省から生み出された作品に論理的な検証を試みている素直な論考で高く評価できる。今後どのように作風を展開していくのか、鉄絵沙器などの加飾等との融合がどのように発展して行くのか注目したい。